

台風で負った心の傷

出石中学校二年 塚本みづき

いきなり無線が鳴り響きました。鳥居が決壊したのです。もうダメだ、そう思うと涙が出てきました。

三時三十分。生温い風が女の嫌な臭いと共に吹いていました。三階から玄関を探したけれど見当りませんでした。もう水にっかっていてとても悲惨な姿でした。朝起きると、いつもの緑豊かな大地は辺り一面泥水の海と

なり、何も言葉が出ませんでした。家に救命ボートが来て救助してもらったのは、作業場の車庫の上でした。いつもは高い所だけ一階にいますよな気分でした。やっと堤防に着いたとき、近所の方々が心配して声をかけてくださいました。本当はうねりかっただけです。夕方、どうしても家が心配だったので見に行くと、水位は全く変わらなず家は泥水にっかたままでした。それからしばらくは、避難所となりました。たみ寺と豊岡の祖父の家を行き来する生活が

続きました。

二十三日の朝、家に帰るでと聞かされた瞬間、私は寒気がしました。何日かぶりの我が家は、泥が壁一面に張り付き、壁がはがれ、窓が激しく割れていました。台風のため、あつとを物語っているようで、恐くなりました。家の掃除をしても、自分へ家が被害にあつたとは実感できません。それから何日も同じ作業が続き、いかげん嫌になつて涙が流れることもあつました。しかし自分

がやる気をなくしている時に、友達が手伝いに来てくれ、その励ましにとつても勇気づけられました。

あれから一年。この水害で家がなくなり緑がなくなりました。今までの穏やかな風景は消えてしまいましたが、しかし少しづつ緑がよみがえり、川にも澄んだ水が流れるようになりました。この水害での経験を忘れず、地域への力を大切にして今後に役立てていきたいです。たけこ心に負つた傷は一生消えない。